子どもの体験コンソーシアムAWARD2026
実践集

2026年11月17日

公益財団法人ミダス財団

子どもの体験
コンソーシアム

掲載事例一覧

No	団体名	実践のタイトル
	■ ソーシャルデザイン賞	
1	認定NPO法人AYA	AYAインクルーシブ映画上映会―静かにしなくていい劇場づくり
2	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会　札幌市旭小ミニ児童会館	子ども運営委員会【まめまるキッズ】
3	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会　こども育成課　南Ⅱブロック児童会館こども企画こども権利チーム	こどもの権利について理解を深めるプログラム開発と実践
4	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会　内部価値向上プロジェクト	「こどもは、あそびの中で育つ」あそび月間実施から見えた景色
	■ 地域資源賞	
5	独立行政法人 国立青少年教育振興機構　国立信州高遠青少年自然の家	「おもいっきり冬を満喫プログラム」
6	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会　定山渓児童会館	定山渓こどもかわまちづくりプロジェクト
7	公益財団法人ハーモニィセンター	「辛いからこその達成感」八ヶ岳縦走キャンプ
8	一般社団法人me	奄美群島を想う大人と、島の子どもたちをつなぐHUB(ハブ)と
	■ ウェルビーイング賞	
9	認定NPO法人Kacotam	子どもの「やりたい」をカタチにするプロジェクト
10	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会　中の島児童会館	ぐんぐんクラブ
11	一般社団法人　DAC未来サポート文化事業団	日本とミャンマーの手づくり絵本　出張読み聞かせ会
12	一般社団法人ナチュラルボディバランス協会	一流アスリートと出会う！6種目×自然・伝統文化体験
13	特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン　ピースワラベ（子ども事業）	安心を土台に、子どもの挑戦を支えるスタディツアー

© 子どもの体験コンソーシアム

AYAインクルーシブ映画上映会―静かにしなくていい劇場づくり

団体名

認定NPO法人AYA

中川 悠樹、森野 杏子、岡田 陽子、阿部 裕乃、東園 織絵、布村 彰宏、高田 亜希、樽川 絵美、手塚 里菜子、北島 優佳里、他



実践の概要

病気や障がいのある子どもと家族に映画館での鑑賞体験を届ける「AYAインクルーシブ映画上映会」の実践です。館内の暗さや大きな音、静粛を求めるマナーが、急に声が出る子どもや医療機器を使う子どもにとってバリアとなり、家族での鑑賞を諦めている家庭は少なくありません。そこでシアターを貸し切り、照明を明るめ、音量を小さめに調整し、声出しや歩き回り、痰吸引等の医療的ケアを許容する環境を整えました。医療従事者（医師や看護師等）が全回帯同し、家族と劇場の双方に安心を担保しています。2023年の開始以来、2026年10月末時点で全47都道府県68劇場にて195回開催し、延べ36,183名が参加しました。「初めて家族全員で映画館に行けた」という声が繰り返し届いています。

実践の特長や工夫したポイント

第一に、子どもを環境に合わせるのではなく、環境を子どもに合わせる発想の転換です。「静かにできるようになったら行く」ではなく、静かにしなくてよい2時間を先に創ります。参加の条件を下げるのではなく、場の側の前提を組み替えました。
第二に、家族と劇場の不安を同時に取り除いたことです。受け入れがためらわれる理由は、劇場側の「万一のとき対応できない」という不安にもありました。医療従事者が全回帯同する体制を標準とし、劇場が判断を一手に引き受けない形にしたことで、興行会社との継続的な連携につながりました。
第三に、運営を属人化させない工夫です。準備・当日対応・声かけの手順をマニュアルに落とし込み、ボランティアに医療資格や専門経験を求めない設計としました。参加家族のきょうだい児等、子どもも運営側として加わっています。これまでに約1,800名のボランティアが関わり、現場の担い手の裾野を広げています。
また、大学や調査団体と共同で、倫理審査を経た縦断調査による効果検証を進めています。

© 子どもの体験コンソーシアム

子ども運営委員会【まめまるキッズ】

団体名

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
札幌市旭小ミニ児童会館
見上知亨



実践の概要

当会館の子ども運営委員会【まめまるキッズ】は、行事企画や読み聞かせ、事業の円滑な進行のサポートを行っています。「企画」「読み聞かせ」「サポート」「装飾」の４つの部門に分かれて活動し、１年を通してすべての部門を経験することで、活動を充実させていく主体的な姿勢やリーダーシップの育成を図っています。２年生から参加でき、３年生以降も継続して参加することで、活躍の場や経験の積み重ねができ、より充実した活動につながっています。また１年生の児童も【まめまるキッズ】の活動を見たり行事に参加したりすることで、２年生以降に活動の幅が広がることへの期待もはぐくんでいます。

実践の特長や工夫したポイント

おおよそ３か月ごとに大きな行事を作り、それに向けて計画的に話し合いや制作を進めています。年度当初より「ほかの人の意見を尊重すること」を徹底し、学年を問わずお互いの意見や考えを大切にする姿勢をはぐくんでいます。また上級生と下級生の混合の活動であることを意識させ、日常的な会館での生活でも学年を超えた交流ができるように促しています。

© 子どもの体験コンソーシアム

こどもの権利について理解を深めるプログラム開発と実践

団体名

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
こども育成課　南Ⅱブロック児童会館こども企画こども権利チーム

畠山　優、原　采子、本間　麻衣子、樫原　拓郎



実践の概要

令和7年4月施行の児童館ガイドライン改正に伴い、こどもが権利の主体である実感をもつことや、日常の遊び・生活の中で権利を学ぶ機会の確保が求められています。これを受け、こどもたちが権利の主体としての自覚をもち、互いを尊重する大切さに気づくとともに、権利と日常を結びつけて捉えられることを目的に本取組を実施しました。小学生が楽しみながら学べるよう、3つの世界（権利のない世界／ある世界／自己の権利のみ主張する世界）を疑似体験できる導入動画を含むプログラムを開発し、感情の動きを軸に展開しました。その結果、こどもたちは権利と自身の生活とのつながりを実感し、理解を深めることができました。

実践の特長や工夫したポイント

本実践では、児童会館の特性を踏まえ、小学1年生から6年生までのこどもが「こどもの権利」を自分事として捉えられるよう、感情の変化を軸としたプログラムを展開しました。理解を促すため、基本となる4つの柱（生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利）と小学生の日常生活を結びつけた導入動画を作成・活用しました。3種類の動画視聴後の感情を比較し、その要因についてグループで対話を行うことで、多様な気づきを引き出す展開としました。さらに、自己分析シートを用いて自身と向き合う時間を設け、権利の内容と日常の行動との結びつきを深めました。

プログラム後半では、ロールプレイ等を通じて他者との関わりを意識した行動について思考を深めました。また、活動の中で出たこどもたちの意見をもとに「権利カード」を作成し、日常的に活用できるようにすることで、プログラム終了後もこどもたちが主体的に振り返ることができる環境を整えました。

© 子どもの体験コンソーシアム

「こどもは、あそびの中で育つ」あそび月間実施から見えた景色

団体名

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
内部価値向上プロジェクト

森岡浩、工藤明美、竹澤幸洋、大門更紗、福井宏充、高杉学人、萱場賢人、澁谷江莉、本田憲司、髙橋麻美



実践の概要

札幌市内の児童会館・ミニ児童会館全199館では、6月11日の国連「国際遊びの日(International Day of Play）」に合わせて「さっぽろあそび月間」を開催しました。本事業は関係機関と連携し、子どもの育ちに欠かせない「あそび」や「あそぶ権利」の普及を目指す取り組みです。期間中には利用者であるこどもたちと保護者へアンケート調査を実施。遊びの実態やニーズを把握し、その結果をまとめたリーフレットを作成・発信することで、地域全体へ理解を広げる取り組みを実践しました。

実践の特長や工夫したポイント

（1）大規模な全館展開（199館のスケール感）

市内各地にある全199館の児童会館・ミニ児童会館を一斉に巻き込み、地域全体で大きなムーブメントを起こしました。

（2）国際的な記念日との連動（話題性と意義の付与）

6月11日の国連「国際遊びの日」を起点にすることで、単なるローカルイベントにとどまらず、「子どものあそぶ権利」というグローバルで本質的な理念をメッセージとして持たせました。

（3）調査・分析を通じたニーズの可視化（現状把握とエビデンス）

実施して終わりではなく、利用者のこどもや保護者にアンケートを行い、実際の「遊びの実態」や「ニーズ」を定量的・定性的に把握に努めました。

（4）リーフレット活用による成果の発信・還元（広報と巻き込み）

調査結果をリーフレットとして可視化し、幅広い世代へ発信することで、館内利用者に閉じず「地域全体への理解促進」につなげました。

© 子どもの体験コンソーシアム

「おもいっきり冬を満喫プログラム」

団体名

独立行政法人 国立青少年教育振興機構
国立信州高遠青少年自然の家
国立信州高遠青少年自然の家職員一同



実践の概要

冬季になると、そり遊びに興ずる子どもたちの笑い声や、久々のそり遊びに興奮を隠しきれない大人の叫び声が聞こえてきます。降雪量は年々減少しています。そこで、ストックしておいた雪を100mと120mの特設そりコースに運び入れ、職員総出で雪を均し、汗だくになって踏み固めます。実にアナログで費用対効果無視のこの冬季のプログラム。「こんなに苦労してまでそりコースを作る意味はあるのか」と、職員誰もが自問自答します。しかし、みんなの答えは「Yes」です。子どもたちがそりで坂をいっきに下ります。そして、また、坂を上ります。何度も何度も続ける子がいます。これが私たちの「Yes」の正体です。

実践の特長や工夫したポイント

施設は標高1200mに位置し、平均気温の低さを利用した「おもいっきり冬を満喫プログラム」を提供しています。

① 林間に趣の異なる二つのそりコースを用意しています。年齢は関係ありません。大人には「子供のころに戻れる」と評判です。ぶつかってもけがをしない衝撃緩和マットを要所要所に敷設しています。降雪量が少なくなったこの地域で、そり遊びを提供し続けています。

② 冬が訪れるころ、木枠で囲いを作り、水が漏れないようビニールシートを敷き詰めます。マイナス10度をこえる寒さを利用して厚さ20センチほどある氷のリンクを職員みんなで作ります。カーリングボーリング場の完成です。氷上に本物のボーリングのピンを立て、本物のストーンを滑らせます。年齢に関係なく楽しめるプログラムです。

© 子どもの体験コンソーシアム

定山渓こどもかわまちづくりプロジェクト

団体名

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
定山渓児童会館
原　采子



実践の概要

札幌市定山渓地区の小学生を対象に、地域の自然体験を通して主体性と未来のまちづくりへの参画意欲を育むことを目的に実施しました。初年度は、地域の自然観察や生き物観察、命の教育（自分で釣った魚を調理する）等の実体験をもとに児童文学作家や地域団体と協働して絵本冊子を制作・発信しました。2年目は「伝える」に重点を置き、地域イベント「定山渓かわあそびパーク」にて一般参加者に川遊びを案内する「こどもガイド」活動を展開しました。活動を通じ、こどもたちは自らの体験をもとに主体的に声掛けやレクチャーを行う姿が見られ、地域への愛着と社会的役割の実感という成果を得ました。

実践の特長や工夫したポイント

・各活動の導入に問いを投げかけ、チームで取り組むことで、自分たちで考え協力して取り組む仕組みづくりを行いました。2年目の「こどもガイド」では、目標設定から当日の案内・レクチャーまでこども自身に委ね、主体性を引き出しました。

・地域団体や児童文学作家と連携し、下見や安全管理、表現活動の専門的サポート体制を構築しました。確かな技術と安心感の中で質の高い自然体験を実現しました。

・体験から得たこどもの言葉やアイデアを絵本制作やポップ作りに反映しました。「自分が体験した価値を社会へ発信する」プロセスを創出しました。初年度の学びを2年目の「こどもガイド」やイベント出展（絵本販売・ワークショップ）へとつなげ、地域の魅力を自ら発信する持続可能なまちづくりの担い手としての芽生えを促しています。

© 子どもの体験コンソーシアム

「辛いからこその達成感」八ヶ岳縦走キャンプ

団体名

公益財団法人ハーモニィセンター
山本直輝



実践の概要

私はハーモニィセンターで「No.1辛いキャンプ」というコンセプトのもと、八ヶ岳縦走キャンプを15年間担当しています。八ヶ岳主峰の硫黄岳・横岳・赤岳の三山を3泊4日で縦走するプログラムで、小学4年生から中学3年生、定員20名を対象に、2011年の立ち上げから16年間で15回、延べ226名が参加してきました。晴天時にはご来光や絶景に出会える一方、長い日は1日6時間程度歩くため、子どもたちにとって「辛い」と感じる瞬間も少なくありません。それでも「辛いからこその達成感」があること、そして「子ども時代に踏ん張る経験をした子は、大人になっても踏ん張れる人になる」と信じ、このプログラムを継続しています。

実践の特長や工夫したポイント

本キャンプは、私が入職2年目に立ち上げ、「辛い体験だからこそ、子どもたちの成長につながる」と考え、15年間継続して実施しています。登山中も「雨が降ったら必ずエスケープルートに」といった画一的な判断はせず、子どもたちの力量やその時の自然環境に合わせて都度判断しています。山小屋の方々やガイドさんとの良好な関係、担当ボランティアリーダーとの毎年の下見等で、子どもたちの体験を深める万全の受け入れ態勢を築いています。約10年前、下山後苦しんだ6年生の女の子に「何が一番辛かった？」と尋ねると「全部」、「何が一番楽しかった？」にも「全部！」と答えてくれました。その言葉が原動力です。自然ガイドの資格を取得し、自分自身もキリマンジャロへの登頂に挑戦しました。今後は子ども達により挑戦できる体験を届けようと、海外登山キャンプ等も検討しています。（現在2027年のGWに他団体と共催で台湾登山キャンプを計画中です）

© 子どもの体験コンソーシアム

奄美群島を想う大人と、島の子どもたちをつなぐHUB(ハブ)と

団体名

一般社団法人me

洞まなみ



実践の概要

奄美群島には大学がなく、高校卒業後95%が島を出てしばらく戻ってこないため、20〜34歳の人口が極端に少ないです。子どもたちは、ロールモデルとなり得る「親や先生以外の少し先を行く若者（センパイ）」と出会う機会がほとんどありません。

そこで、3年間にわたって、長期休みにme cafeを開催してきました。奄美群島の中や外から呼んだ「センパイ」たちと子どもたちが並列な関係性の中で、一緒に奄美らしい体験をすることによって、自分らしさを解放したり地域の良さを感じたりする活動を行ってきました。

・参加してくれた小中高生：114名、満足度100%

・関わってくれた島の内外の大人（センパイ）：32名

実践の特長や工夫したポイント

メンバー3人はそれぞれ子育てをしながら本業を別に持つ母親です。共通するのは「奄美のために自分のできることをしたい」という想いだけ。そのため、活動開始以来、じっくりゆっくり輪が広がる循環を作り続けています。

2人のメンバーは島外で暮らしているため、日々「島外にいながら奄美に想いのある大人（センパイ）」をスカウトし続けています。センパイたちは一度奄美に来ると、その魅力に惚れ込み何度も訪問したり、奄美を起点とした協業の輪が広がったりしています。例えば、奄美のモリンガ農園と東京のデザイナーが繋がり、今後の協業に関するディスカッションが実現しました。

子どもたちは、me cafeで「繋がり」「支えられている実感」「応援されている実感」を得ることで、将来何かの課題に直面したとき、自らその解決に踏み出し、そのために周りを巻き込む力が育まれていくと考えています。

© 子どもの体験コンソーシアム

子どもの「やりたい」をカタチにするプロジェクト

団体名

認定NPO法人Kacotam

高橋勇造



『ジェットストリームがなぜ書きやすいのか知りたい』を解決するために販売会社を訪問している様子

実践の概要

・目的・対象

貧困や虐待などによって、想いや何かに取り組む力が潜在化してしまっている子どもを対象に、子どものちょっとした「やりたい」を具現化し、自身が本来もっている意欲や主体性を発揮する機会をつくることを目的としています。

・結果

これまでに企業やボランティアの知り合い、寄付サポーター、店舗などの団体内外の協力を得て、学習支援で関わる子どもの90以上の「やりたい」を実現してきました。カタチにすることによって、①自身の想いや考えを表現するようになる、②新たに「やりたい」ことを発信するようになる、③スタッフとの関係性が深まり学習意欲が向上するなどの効果が見られています。

実践の特長や工夫したポイント

子ども一人ひとりの「やりたい」（顕在化・潜在化しているもの両方）に向き合い、その子のためにそのやりたいをカタチにします。また、「子ども自身」でそのやりたいを実現できるようにサポートします。大人がおぜん立てをするのではなく、子ども自身でできることは子ども自身で、難しいことはスタッフがサポートをし、子ども自身の主体性を発揮できるように環境を整えています。

日々の生活で周りの子が当たり前のように手にしていることを手にすることができない経験を積み重ねている子どもが、日々の生活や感覚を超えて想像できるように、スタッフもそのやりたいに共感を示しながら、よりわくわくなるように、楽しいものになるように話し合いながら、その子の「やりたい」をカタチにしていきます。また、「やりたい」には鮮度があると考え、スピード感をもって、カタチになるように、団体内外の多くの協力を得て実施しています。

© 子どもの体験コンソーシアム

ぐんぐんクラブ

団体名

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
中の島児童会館
丸山杏奈、白濱賢哉



実践の概要

畑での野菜栽培を復活させたいという子どもたちの声をもとに、クラブ活動であるぐんぐんクラブを設立し、畑起こし～野菜の収穫・調理までを実践しました。その中で、野菜の様子を観察したり、クイズを考えたりして新聞を書いたり、看板作りやカラス対策をみんなで考えたりしました。

実践の特長や工夫したポイント

30人以上いるクラブ活動なので、学年ごとに役割をふったり、グループごとの活動を行い、自分の意見を言いやすく工夫した他、1人1人が役割をもつことで責任感を持って積極的に、取り組めていました。子どものやりたいという気持ちをサポートし、一度活動を諦めそうになった子どもについても、直接保護者の方に職員から相談することで、参加を実現することができました。また、保護者の方も巻き込んで収穫した野菜を使用したクッキングを行ったことで、保護者同士の繋がりや地域の繋がりも増やすことができました。

© 子どもの体験コンソーシアム

日本とミャンマーの手づくり絵本　出張読み聞かせ会

団体名

一般社団法人　DAC未来サポート文化事業団

石川和則



実践の概要

弊事業団は、ミャンマーの尼僧院の子どもたちと日本の子どもたちが共同制作した絵本『こんにちは、ミャンマー』を用いた出前授業を実施しています。

近年急増する在日ミャンマー人など、多様な背景を持つ人々との共生を身近な課題と捉え、全国の学校・学童・児童養護施設で展開中です。

五感を使った文化体験や、ミャンマー現地と繋ぐオンライン交流を組み合わせることで、子どもたちの中にある心理的な壁を取り払い、他者を思いやり共に生きる豊かな心を育む実践的な異文化理解プログラムを提供しています。

実践の特長や工夫したポイント

本プログラムは、絵本の朗読に加え、民族衣装「ロンジー」の試着や伝統競技「チンロン」、現地のミルクティの試飲など、五感を通じたリアルな文化体験を重視しています。また、開催地ごとにエリアの特性や地域の在日ミャンマー人人口を調べてスライドに追加し、参加する子どもたちが多文化共生をより「自分ごと」として身近に感じられるよう工夫しています。

さらに、柔軟なハイブリッド形式の開催も特長です。沖縄での開催時には、現地にスタッフを1名派遣して臨場感のあるリアルな絵本朗読を行う一方、その他の文化体験やミャンマーとの交流コンテンツは東京の事務局とオンラインで繋ぐハイブリッド形式で実施しました。距離の制約を越え、全国どこへでも質の高い体験を届けています。

© 子どもの体験コンソーシアム

一流アスリートと出会う！6種目×自然・伝統文化体験

団体名

一般社団法人ナチュラルボディバランス協会

勅使川原郁恵



実践の概要

一般社団法人ナチュラルボディバランス協会では、子どもたちが一流の「本物」に触れ、自分の可能性を広げることを目的に「星のスポーツクラブ」を実施しています。オリンピック選手や日本代表選手など、一流アスリートから直接学び、2か月ごとに種目を変えて、年間6種目のスポーツを体験します。さらに月1回、自然体験や日本の伝統文化に触れる活動も取り入れています。スポーツの技術だけでなく、挑戦する心、継続する力、礼儀や感謝、豊かな感性を育み、「やってみたい！」から新たな夢や目標につながる体験を提供しています。

実践の特長や工夫したポイント

① 一流アスリートから直接学ぶ「本物体験」を通じて、技術だけではなく、挑戦する姿勢にも触れられる機会をつくっています。

② 1年間で6種目を体験できる環境を作ることにより、特定の競技に限定せず、さまざまな競技との出会いを創出。「自分は何が好き？何が得意？」を子ども自身が発見できる仕組みにしています。

③ スポーツ＋自然＋日本伝統文化の多様な体験

月1回はスポーツ以外にも、自然の中での機会を設定。身体を動かすだけではなく、五感を使い、感性・好奇心・文化への関心を大切にしています。

④ 「できる・できない」ではなく「やってみる」を大切にする

勝ち負けや技術の上達だけを目的とせず、挑戦する気持ちを大切にしています。子ども一人ひとりの「やってみたい」を尊重しています。

⑤ 体験を未来の「夢」につなげる

多様な体験を通じて、子ども自身が自分の可能性を見つけ、夢に繋がる体験を提供しています。

© 子どもの体験コンソーシアム

安心を土台に、子どもの挑戦を支えるスタディツアー

団体名

特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン

ピースワラベ（子ども事業）　野田悠吏、武川菜摘



実践の概要

毎年実施している本スタディツアーでは、児童養護施設・自立援助ホームで暮らす高校生と離島の高校生11名を対象に、広島と韓国を舞台とした9日間のプログラムを実施しました。

安心して参加できる関係づくりを土台に、講話やフィールドワーク、異文化交流、グループワーク、日々の振り返り、スピークアウトを一連の体験として設計しました。参加者は、初めての海外や言葉の壁に向き合いながら、自分で考え、決め、伝える経験を重ねました。

事後評価では、5択式37項目中32項目、記述式37項目中36項目で、参加者11名のうち3名以上にポジティブな変化が確認されています。

実践の特長や工夫したポイント

「大人が用意した正解を受け取る」のではなく、子ども自身が「旅をつくる側」になれることを重視しました。

本番前には、伴走する大学生・ユースを対象に研修を実施。子どもの権利や「声を聴く」姿勢、セーフガーディングなどを学び、チームで支える共通認識をつくりました。

高校生たちには、選考面談時から、評価ではなく、一人ひとりの思いや希望を聞き、ツアーとのミスマッチを防ぐための“対話”であると伝えながら行いました。ツアー初日には「自分の言葉で話す」「一人ひとりの声に価値がある」ことを共有し、安心して発言できる土台を整えました。

韓国では自主行動ができる時間を設け、自分たちで決めて挑戦する機会を創出しました。また、大人を入れないワークショップを通じ、仲間の言葉から自分の新たな一面や強みに気づく場、自分自身を新たな視点から捉え直す機会をつくりました。

毎日の振り返りやスピークアウト、帰国後の定期的なフォローアップを通じて、体験をそれぞれの次の一歩へつなげています。

© 子どもの体験コンソーシアム



子どもの体験
コンソーシアム